

東北タイにおける生活技術過程の地域差

| | |
|--------|---|
| 著者名(日) | 佐川 哲也, 大澤 清二 |
| 雑誌名 | 大妻女子大学紀要. 家政系 |
| 巻 | 29 |
| ページ | 257-269 |
| 発行年 | 1993-03 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1114/00002433/ |



東北タイにおける生活技術過程の地域差

佐 川 哲 也*・大 澤 清 二*

Urban-rural Differences in Life Skills in Northeastern Thailand

By Tetsuya Sagawa and Seiji Ohsawa

はじめに

衣・食・住は文化である。人類が長い歴史の中で創造し、改良しそして継承してきた人類固有の文化であり、人間生活の最も基本的な文化である。かつて中尾はその著書『栽培植物と農耕の起源』および『料理の起源』の中で「種から胃袋まで」という食物の種類、その加工法、料理法、食べ方などを射程にした視点を一貫して提唱した^{1,2)}。本研究では中尾の視点を参考にしつつ、衣食住を生活技術過程として捉えた。すなわち米食を例にとれば、種粃から粃を生産し、脱穀・精米し、料理し、食べる過程である。本研究では、衣食住文化をこの生活技術過程という視点を導入することによって捉え、そこに見られる生活技術の変容について分析を試みるものである。特に本稿においては、現在も地域的勾配が顕著な東北タイ農村をフィールドとして行なった調査について報告する。

分析の方法

衣食住文化の生活技術を以下の4つの過程から捉えた。

1. 原材料獲得過程（農林水産業に従事して原材料を生産する過程である。）
2. 第一次加工過程（原材料に手を加えて、加工品に作り変える過程である。）
3. 第二次加工過程（第一次加工過程によって作り出された加工品にさらに手を加えて消費財にする過程である。）
4. 消費過程（出来上がった消費財や製品を消費する過程である。ここでは衣服の洗濯と家屋の修理など消費財の再生産過程もこれに含めた。）

これらの生活技術過程は、ある品物を新しい別の物に作り変える過程であり、そこには特定の技術の体系が存在する。食文化の第二次加工過程である調理を例にとれば、モチ米を蒸すという技術の体系があって、その体系は、米をとぐ技術、火力コントロールする（炭を操る）技術など、多くの下位技術から構成されていて、ある技術は道具を伴っている。そればかりか、自給自足の傾向の強い社会ではモチ米を蒸す技術に先立って、炭を焼く、竹の甑を編むといった道具を製作したり、燃料などを製造する技術が存在している。そして、それぞれの民族あるい

* 人間生活科学研究所 大妻女子大学

表1 地域別にみた衣食住文化の生活技術過程

| | 原材料獲得過程 | 第一次加工過程 | 第二次加工過程 | 消費過程 |
|----|---------|---------|---------|------|
| 農村 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 郡 | — | — | ○ | ○ |
| 都市 | — | — | — | ○ |

○：現在でも確認される生活技術である。

—：現在では消失した生活技術である。

は地域に特有の伝統的な生活技術というものが存在する。例えば東北タイに生活するラオ族のモチ米を蒸す技術、炭を焼く技術といった具合である。これらの生活技術はさらに道具の扱い方、扱う手順、扱う時の姿勢など様々な視点から説明することが可能である。ここでは民族間にみられる相違に注目するのではなく、東北タイに生活するラオ族の生活技術が居住地域の違いによってどのように異っているかに注目した。居住地域の相違に注目するのは、地域によって都市化の速度が異なるため、それに伴って変容する生活技術の変容の速度とパターンが異なると予想されるからである。あえて仮説を提出するとすれば、衣食住文化をめぐる様々な生活技術が、都市と農村を比較したときに都市においていち早く消失する傾向にあるということであり、現時点での変容の実態を明らかにするものであり、消失しつつある生活技術の変容過程を浮き彫りにするものである(表1)。

本研究では、衣文化として「衣服」を、食文化として「モチ米食」を、住文化として「高床式木造家屋」を取り上げて生活技術という視点で調査を行った。調査は、都市化による違いを分析するために地域的勾配³⁾を考慮して標本を選択した。東北タイのウボン県に在住する小学校のうち、最も都市化が進んでいる県庁所在地であるウボン市の小学校(ウボンウィタヤーコム小学校)、都市化がある程度進みつつある郡役所所在地であるビブン町の小学校(ウィパークウィタヤーコン小学校、テーサバンビブン第一小学校)、都市化の影響をほとんど受けていないデウウドム郡の純農村の小学校(ナーカセーン村小学校、ノーンガンホイ村小学校、タウーイ村小学校)を選んで児童を対象に質問紙調査を実施した。標本数は表2に示すとおりである。調査は1991年1月に実施した。

東北タイ農村の衣文化

東北タイに居住するラオ族の伝統的な服装は、男子ではパカマー [ผ้าขาวม้า] と呼ばれる巻布、女子ではシン [ผ้าซิ่น] と呼ばれる筒状の巻布が特徴である。これらの巻布は日常生活の中でよく目にすることができる。水浴の後にはこれを腰に巻き付け中庭などで夕涼みをする家族の風景をよく見かける。また、シンを巻いて市場で働く女性や家族で子守りをする姿など、現在でも普段着としてこれを着用する者は多い(写真1)。タイの女性は素肌を人に見せることを極度に嫌う文化を有しているため、水浴時にはこのシンを胸まで上げて用いる習慣さえある。男子のパカマーの大きさは縦約70 cm、横約200 cm程度で綿花を手で紡いだ糸を使って織った伝統的なものが好まれているようだ。また、人によっては絹製のものを好んで着用している。女性用のシンは縦約100 cm、横約170 cm位の綿のプリント地の布で、短辺を縫い合わせて筒状にしたものを腰に巻いてその端を押し込んで固定した簡単なものである。特に布を固

表2 標 本 数

| 地 域 | 学 校 名 | 学 年 | 人 数 |
|-----------|-----------------|-----|-----|
| ウ ボ ン | ウボンウィターコム小学校 | 5 年 | 120 |
| ピ ブ ン | ウィパークウィタヤーコン小学校 | 5 年 | 79 |
| ピ ブ ン | テーサバンピブン第一小学校 | 6 年 | 35 |
| デ ッ ウ ド ム | ナーカセン村小学校 | 5 年 | 59 |
| デ ッ ウ ド ム | ノーガンホイ村小学校 | 5 年 | 37 |
| デ ッ ウ ド ム | タウーイ村小学校 | 6 年 | 36 |

定するための紐類は用いない。伝統的なタイの模様もあれば、マレーシアやインドネシアのパティック様のプリント柄もある。女性の場合には、シンとは異なるがやはり巻スカート状の正装服がある。伝統的な上着を普段はあまり見かけることがないが、祭りの時などには藍染めの綿のシャツなどを目にすることができる。街で見かけるモダンな現在の服装は日本とあまり変わらないうである。西洋風のシャツやスカートもしくはズボンである。若者はジーンズを好んで着用している。しかし、足元だけはサンダルや草履を履いた者が多く、東北タイでは靴を履いた女性やストッキングを着けた女性を見ることはそう多くはない。

衣文化の生活技術過程

東北タイに居住するラオ族の衣に関わる生活技術は図1に示すような過程で捉えられる。原材料獲得過程は綿花を生産する過程であり、種子から綿の木を育て綿花を収穫する過程である。第一次加工過程は原料である綿花を加工して服地となる布を作り出す過程であり、大きく紡績過程として捉えられる。第二次加工過程は第一加工過程において生産された布を用いて衣服を



写真1 朝市に集まってきた人々の服装（農村）

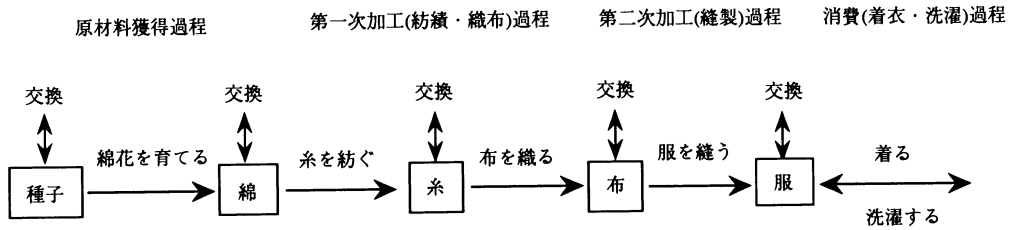


図1 衣に関わる生活技術過程

生産する過程であり、概ね縫製過程と呼ぶことができよう。最後の消費過程は完成品となった衣服を着る過程であり、着衣過程ということになるが、衣服の場合は食物とは異なって一度加工された物は何度でも消費することができる。つまり、洗濯という再生産過程を通じて再び消費が可能となるため、ここではこの洗濯過程も消費過程の中に含めることとした。

これら四過程を衣に関わる生活技術過程として質問項目を作成した。原材料獲得過程としては「家庭で綿花を栽培しているか」、第一次加工過程としては「家族の中で布を織れる人がいるか」を採用した。第二次加工過程では縫製過程を代表する技術として「かがり縫いができるか」とした。消費過程では特定の衣服を着るかどうかを本来質問すべきであるが、衣服を特定することは難しく、「服を着るか」という質問は断念した。その代用として、再生産過程である洗濯過程を採用して「あなたは服を洗うことができるか」とした。

図2は採用した生活技術を地域別に示したものである。図中では左から原材料獲得過程、織布過程と順に配置したが、どの地域をみても概ね原材料獲得過程では低い割合であるものが、徐々に高くなって洗濯過程では最も高い割合を示す結果となる。現在の衣に関わる洗濯やかがり縫いなどの生活技術は日常身に付ける衣服に関する技術であって、よく身に付いていると言えるが、衣服の材料となる布あるいは綿花の生産過程になると徐々に技術を持たなくなってい

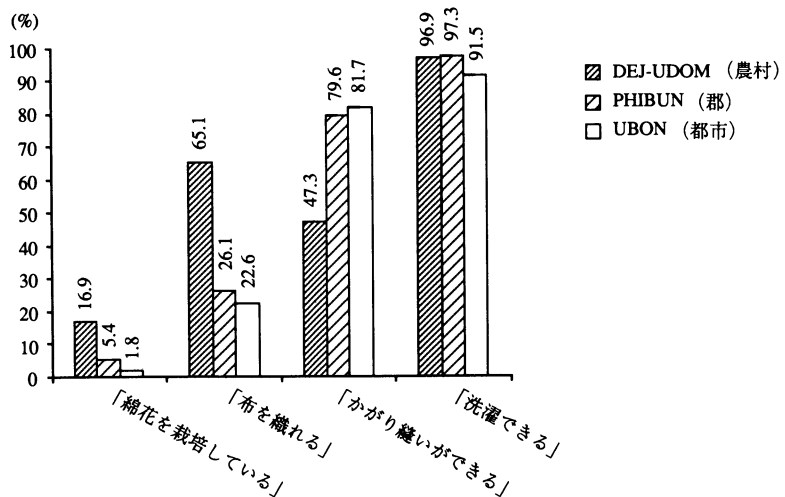


図2 生活技術過程からみた衣服の地域別差異

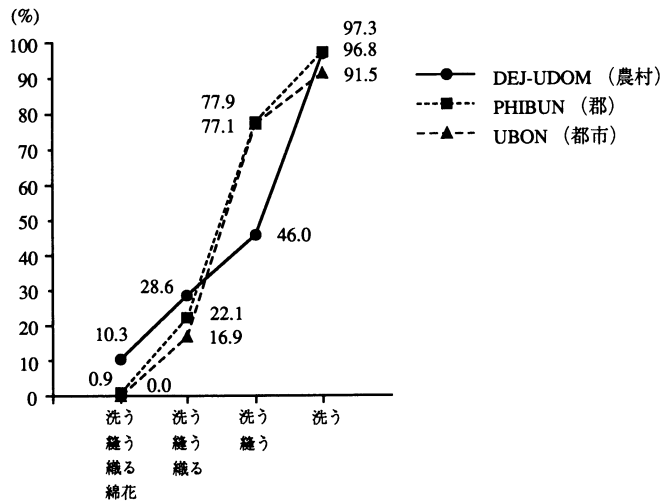


図3 完全自給自足的衣服の地域的差異

るという結果であった。これを地域差に注目してみると「かがり縫い」を除く3つの生活技術について、都市よりも農村によくみられる結果であった。「綿花を栽培している」と「布を織れる」については「みられる」という表現よりもむしろ「残っている」という表現の方が適当であるかも知れない。

次に衣に関わる生活技術をどれだけ自給自足的に行っているかを示したものが図3である。自給自足的であるということは自分で育てた綿花で糸を紡ぎ、布を織って服を縫い、そして着ているかということであり、全過程を自らが行うとすれば完全自給自足的であると言えよう。結果は三地域とも「洗う」技術だけをみると高い割合を示しているが、「縫う」、「織る」、「綿花を育てる」という前段階の過程が追加されるに従ってその割合が低下していく。完全自給自足的である者の割合は農村で約10%、都市0%であった。

以上の結果は衣に関わる生活技術のうち、東北タイ全地域的な傾向として布を生産する技術がほとんど失われてしまっていることを示すものである。このように考えてみると、縫うという技術が高い値を示しているが、これは布を縫い合わせて衣服を作るというよりも、むしろ服を修理するという技術に起因していると解釈するほうが妥当ではなかろうか。つまり、現在の東北タイの衣に関わる生活技術は服の修理と洗濯の技術が中心で、服を綿から作るという技術は失われつつあるといえよう。

この結果を前提として改めて東北タイの人々の衣生活を概観してみると、すべて自らの手による衣服を着用している人は皆無であると言ってもよい。その根拠は容易に見つけられる。すなわち既に製糸、織布の機械化がタイに導入されて久しく、外国産やタイ国産の衣料品が安価に流通するようになっているからである。もはやすべてを自らの手によって作るよりも、工場で大量に生産された製品を購入するほうが、手間からいっても価格からいっても質からいっても優れているからである。東北タイでも衣服の自給自足的傾向は消失しつつあるといえそうであるが、現在も生糸を含めた製糸・織布技術は伝統工芸という形で継承されているようである。

東北タイ農村の食文化

東北タイはモチ稲文化圏である。主食に蒸したモチ米 [เจ้าเหนียว] を食べる。渡部によればモチ米を主食とする地域は、世界中でこの東北タイ、北タイおよびラオスの一帯しかない⁴⁾。モチ米の蒸し方は日本の蒸籠の原理と同様である。さっと水洗いをしてしばらく水に浸しておいたモチ米を竹で編んだ甑に入れ、これを釜にのせて下から七厘の炭火で蒸すのである。蒸し上がったモチ米は竹で円筒形に編んだフタつきのクラティプ [กระติบ] と呼ばれるかごに入れておかれる。

食事は土間や縁台にゴザを敷き、もち米とおかずを中心にして家族が車座に坐り、モチ米を竹カゴから取り出しては一口大の大きさに丸め、おかずを指で一緒につまんで口の中に放り込む。汁ものはチリレンゲを使って食べる。多くの場合、箸やスプーンは使わず素手かチリレンゲのみで食べる(写真2)。

タイ語では米はカウ [ข้าว] である。このカウという言葉は日本語の「飯」という言葉の用法と同じく「炊き上がった米」をさすばかりでなく、「食事」全体をも指して使われる。また、おかずはカップカウ [ก้นข้าว] と言い、概ね「飯につけあわせる物」という意味である。これらの言葉から米を主食として副食(おかず)と一緒に食べる様式の食事文化を有していることがわかる。

副食は敷地内や近くの畑、また水辺などで採れた豆や菜葉そして果実、川や池で捕れる魚や蛙のほか、家で飼育していた鶏や家鴨がその材料となる。味付けは主にナムプラー [น้ำปลาร้า] という魚醤、パラー [ปลาร้า] という魚の塩辛や唐芥子、香菜の類を用いて、サラダ、スープ、炒めもの、焼物などのおかず類が作られる。



写真2 モチ米食の食事風景(農村)

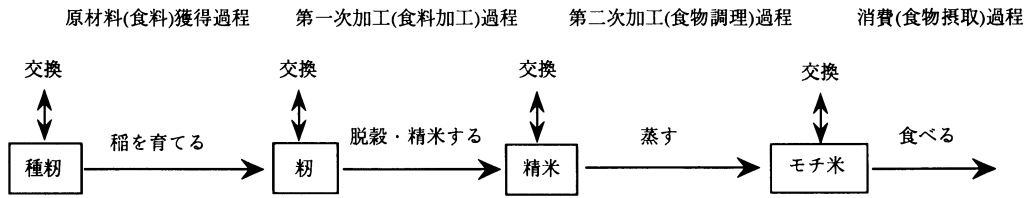


図4 モチ米食に関わる生活技術過程

モチ米食の生活技術過程

東北タイに居住するラオ族の主食であるモチ米食を生活技術過程から捉えたのが図4である。モチ米食の原材料獲得過程は種籾からモチ稲を栽培してモチ米を収穫する食料獲得過程である。第一次加工過程は籾から精米を作りだす脱穀・精米の食料加工過程である。第二次加工過程はモチ米を蒸す食物調理過程である。消費過程はモチ米を食べる食物摂取過程である。食の場合には衣と異なって食べたそれきりの再生産の不可能な特徴を有する。

食料獲得手段を有するモチ稲生産者がモチ米を食べる場合には、これらすべての過程を自らの労働によって行っている。一方、食料獲得手段を持たない者は食料獲得過程を食料獲得手段を有する者から金銭との交換によって補い、モチ米を手に入れることになる。この金銭との交換（購買）は、食料獲得手段を持たない者ばかりでなく、食料加工手段、食物調理手段を持たない者にも有効である。言い換えればモチ米を摂取する方法は何通りもあって、自らがモチ米を栽培していなくても各過程で作り出されたモチ米を商品として買い求めることで可能になる。ではどの過程を自らがいき、どの過程を交換によっているのであろうか。食物摂取過程に

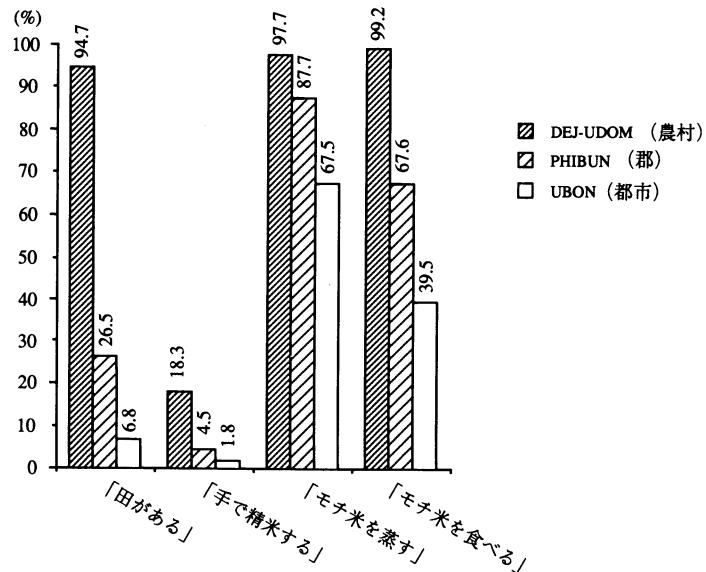


図5 生活技術過程からみたモチ米食の地域別差異

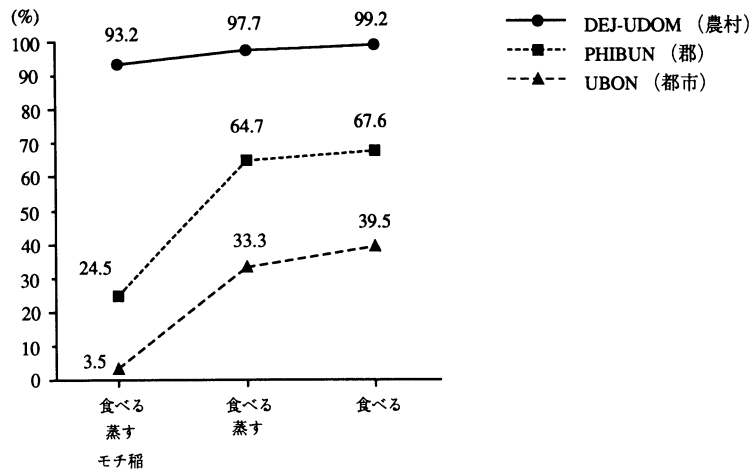


図6 完全自給自足的モチ米食の地域的差異

より近い過程ほど自らの手によっていると考えても異論のないところであろう。これに従って、モチ米食の生活技術過程を手離していく段階を考えると、四段階すべての過程に携わっている者は自給自足的であり、逆に最後の食物摂取過程のみに携わっている者は依存的である。この時食料獲得手段を有する農民は自給自足的であり、商店の多い都市に生活する人々が依存的であることは容易に想像できるところである。では現在、東北タイ農村ではどの程度自給自足的であり、また、東北タイの都市ではどの程度依存的であるのだろうか。図5は「主食にモチ米を食べるか」「モチ米を蒸すことができるか」「手で精米をしているか」「水田があるか」を地域別に示したものである。この図は2つの大きな特徴を示している。その第一は、4つの質問のすべてについて農村、郡、都市という順で農村が高い割合を示したことである。つまり農村は都市に比べて水田が多く、手作業で精米をする割合が高く、モチ米を蒸すことができる割合が高く、そしてモチ米を食べる家庭の割合が高いという結果である。ちなみにモチ米を食べない家庭ではウルチ米を食べている。第二は、精米を手で行う家庭が三地域とも少ないということである。農村において少ないということは、農村に精米機が導入されて、農民が手作業で精米をよりしなくなったことを意味している。農村への精米機の導入が自ら手作業で行わずとも精米機を所有している家に代行してもらうという形で食料加工過程の一部を一変させたことになる。

ここですべての過程を自らの手によって行っている家庭を完全自給自足と仮定すると、農村、郡、都市の三地域でどのような違いがあるだろうか。すなわち、自分で作った米を自分で蒸して食べる家庭がどのくらいあるかということである。機械への依存度が高い作業については分析から除外することにして、モチ米を食べている者がどのくらいモチ米を蒸しているか、さらにモチ米を栽培しているかを示す図6を描いた。完全自給自足的にモチ米を食している者の割合は、農村(94.9%)、郡(24.5%)、都市(3.5%)と顕著な地域差がみられた。特に農村においてはほとんどすべての者が完全自給自足的であると言い得る。逆に都市では、3.5%と非常に低い値を示した。これは都市に生活している家庭がモチ稲を栽培していないことを同時に示す結果でもある。都市・郡ではモチ稲を栽培していない、田がないがゆえにモチ米を食べなくなっ

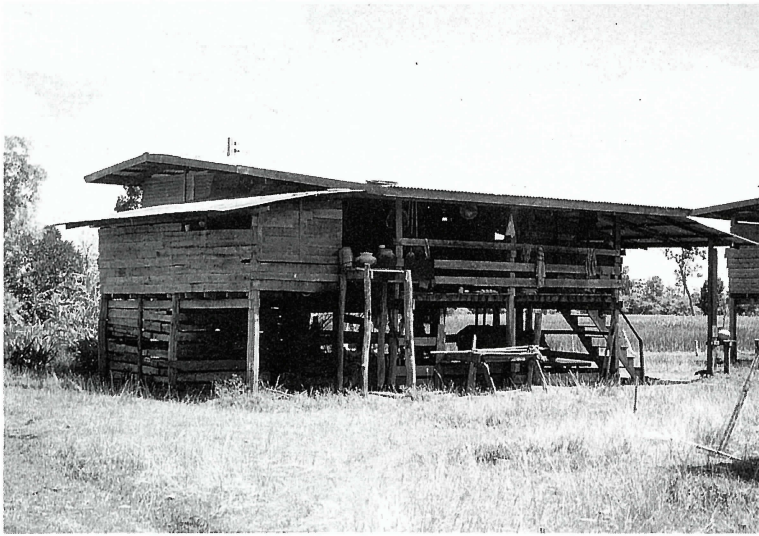


写真3 高床式木造住居（農村）

ているとも言えるのではなかろうか。

東北タイ農村の住文化

東北タイの伝統的住居は高床式の木造住居である（写真3）。都市部ではレンガやコンクリートブロックを用いた建物が多くなっているが、農村地帯では依然としてこの伝統的高床式住居が多い。高床式住居の階下部分は水牛小屋や物置になっていたり、縁台において家族の憩いの空間を作っているケースが多い。また、階下部分に機織り機を置くなどして仕事場の空間として利用している家も多い。階下部分を住空間として利用している家では、別棟の水牛小屋を敷地内に有しており、経済的に多少豊かな家であるようだ。この伝統的な高床式住居は家族と親類の手によって建てられるケースが多く、自ら木を切り出してきて建設予定地に足場を組んで固定し、大きな板ひき鋸を二人がかりで操って板材を切り出している。農閑期には竹細工をする光景と同じくらいよく見られる風景である。比較的簡単な作りの住居は屋根をチャーク[จอก]と呼ばれるニッパヤシの葉で葺かれている。最近はトタン屋根の家が多く、屋根に降った雨水をトタンで集めて瓶に溜め、飲み水として利用している。こうした高床式の家では調理は階上にあるが、トイレと浴室は階下もしくは別に小屋を建てることが多いようである。住居には部屋数はあまり多くなく、経済的に余裕ができれば結婚を期に独立するそうである。したがって親子夫婦が同じに家屋に同居しているケースはあまり多くない。

住文化の生活技術過程

住居をめぐる生活技術は家屋の種類に大きく依存している。つまり、どのような材料によって建てられているかということが、耐用年数や材料の加工法および修理の技術などを規定している。例えば、木材のみから建てられた家とコンクリートによって建てられた家では、家の構造や材料はもちろんのこと、建て方、耐用年数などとあらゆる点で異なっているはずである。こ

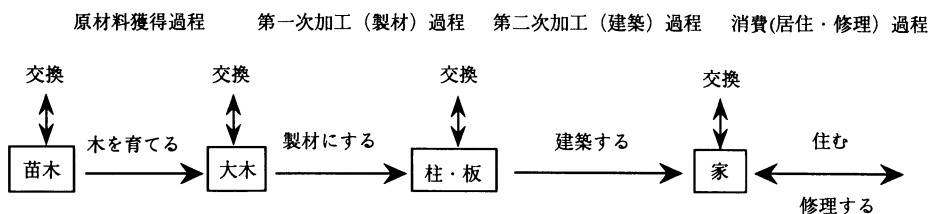


図7 住に関わる生活技術過程

うした点を考慮して、東北タイ農村の代表的家屋を選択すると、伝統的な高床式の木造住居が特定されてくる。この木造住居は屋根を除くほとんどすべてが木造によって構成されており、現在でも農村に居住する人々の多くは自らの手によって建てている。小さいものであれば2～3人で1か月程度の仕事であるようだ。

本研究では、この木造家屋を東北タイの住文化として捉え図7のような生活技術過程を仮定した。原材料獲得過程は木造家屋の材料となる木を育てる過程である。従って森林や畑を所有しない者は当然この過程をもたず、木もしくは完成した家を購入することになるだろう。第一次加工過程は建材となる柱や板となる木材を生産する過程であり、成木を伐採し、木を乾燥させ、鋸で製材する過程である。第二次加工過程は木材を家屋の柱や床板・壁板として組み立て、実際に形のある家にする建築過程である。消費過程は実際に住む過程であるが、本研究では家屋を維持する過程として修理過程を含めて住居・修理過程とした。

調査にあたっては、原材料獲得過程として「家族の所有する木を使って建てた」を採用した。第一次加工過程は製材過程であるが、ほとんどの場合には第二次加工過程である建築過程と一緒に行われている場合が多いので、ここでは一連の過程とみなして「家族で建てた」を質問項目として採用した。消費過程としては修理過程である「家族で修理する」を採用した。さらに、

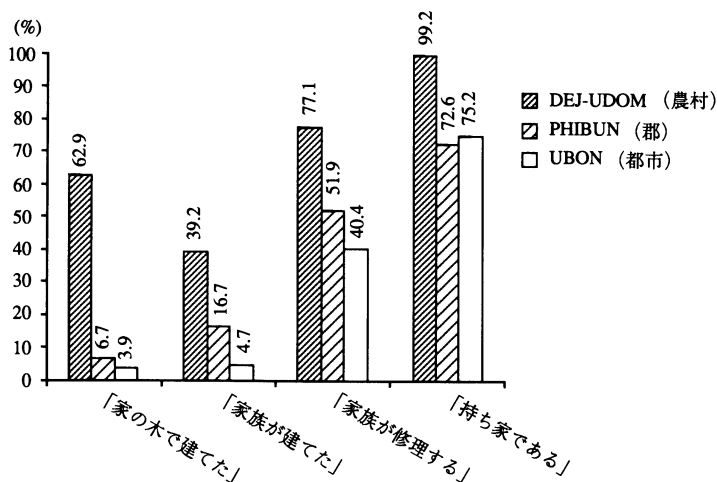


図8 生活技術過程からみた家屋の地域別差異

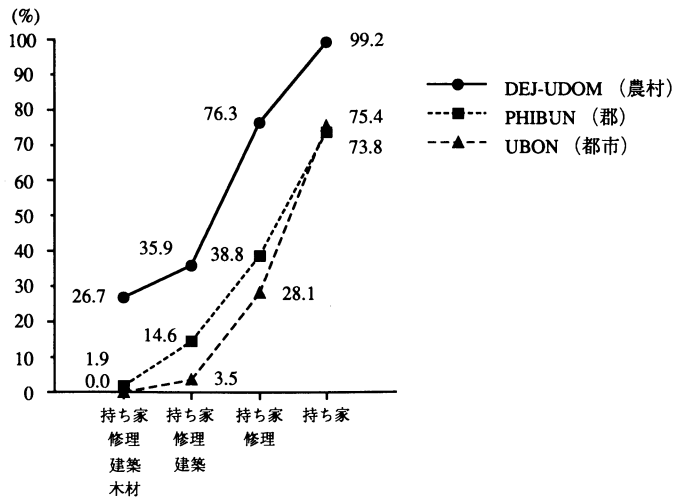


図9 完全自給自足の家屋の地域的差異

家屋の建築にはそれが自分の家屋であるということが重要となるため、「持ち家である」ことを項目に加えた。

図8は採用された4つの質問項目を地域別に示したものである。結果は、「持ち家である」、「家族が修理する」、「家族が建てた」、「家の木で建てた」の順で値が低くなっており、特に都市における住に関わる生活技術は原材料獲得過程と消費過程とに明らかな差がみられた。一方農村では、値が低下していくものの差は小さく、最も低い値を示した「家族が建てた」でさえ39.2%とむしろ高い値を示した。

図9は家屋の完全自給性を示したものである。完全自給的である家族では、自分の家を、自分の木材を使って、自分で建てしかも自分で修理していることになるが、郡と都市ではほぼ0%であるのに対し、農村では26.7%が現在も家屋を自給している。つまり、農村では住に関わる生活技術を現存させている結果であった。ではなぜ、郡や都市では自給的に家を建てなくなったのであろうか。まず、都市流入者には借家住まいの人が多いことが考えられる。土地を持たない者の増加が原因の第一と考えてよかろう。第二は住居構造の変容が考えられるであろう。コンクリートや鉄骨を多く用いる家を建てることで、既に自給性を持ってなくしているのである。

衣食住に関わる生活技術の喪失と変容

衣食住に関わる生活技術は人間生活の最も基礎にある技術であり、それゆえに産業の基礎となる技術である。原材料獲得過程は農林水産業過程として、加工過程は工業過程として、消費過程は商業過程として概ね整理できる。これに従えば、原材料獲得過程は農村の技術であり、また加工・消費過程は都市の技術であると仮定することもできよう。しかし、個人の生活技術という視点でこれらの技術を眺めてみると、人類が長い歴史の中で人間ひとりひとりの身体の中に記憶させ、伝承してきた身体文化であることが分かってくる。我々の祖先たちは少なからずこれらの生活技術を身に付けていたに違いない。その証拠に東北タイ農村に生活する人々は現在もこれらの生活技術を持ち続け自給自足的な生活をしている。本研究はこの人類固有の伝統

文化である生活技術が東北タイの人々の中にどれだけ継承され残っているかを明らかにしようとするものであった。その結果、程度の差はあるものの衣・食・住のすべての生活技術が東北タイ農村の人々の身体技術として現存することを突き止めることができた。しかし、その状況は消失の危機的状況にある。農業の機械化や商品経済の浸透が人々の生活技術を喪失させようとしている。現に精米の身体技術は機械にとって替わられたと言ってよいし、紡績、織布の技術も日常生活の技術というよりは伝統工芸（産業）の技術へと質を変えていると言わざるをえない。一方、農村においてはモチ米食の生活技術はかなり自給自足的であるといえるし、また、農村における住に関わる生活技術も自給自足的傾向が認められる。

衣・食・住の生活技術を比較してみると、食の技術が最もよく継承されている。これは食に関わる技術が毎日のしかも再利用を許さない技術であり、技術を用いる頻度が衣・住に比べて格段に多いということによるものであろう。しかし、モチ米を食べないというモチ米食消失の可能性が都市から農村に及びつつあることも事実である。次は農村に見られる高床式の木造住居に関わる生活技術である。都市や郡ではほとんど消失した文化であると言えるが、農村においてはその生活技術も現存している。農村の男たちは農業に関わる技術ばかりかいわゆる大工の技術も有しているのである。これは、農村の伝統的住居が比較的簡単な技術体系によって建てられていることに加えて、農村における住文化が都市の様式へとまだまだ変化していないことによると考えられる。衣に関わる生活技術は農村も含めて既にほとんど消失した。特に衣服を生産する過程が完全とも言える程無くなってしまっている。裁縫技術についても衣服を生産するための技術としてではなく、ほつれたところをかがったり、破れたところを繕ったり、とれたボタンを着け直すといった修理の技術として存在していると解釈されるのである。都市と農村とを比較するという形で分析をしてきたが、ほとんどすべての生活技術において都市民よりも農民によく技術が認められるという結果であった。これは都市が農村よりも早く従来の技術を必要としない商品の恩恵を受けること、また、より発達したサービスによって本来身に付けていた身体技術を金銭によって代行させていることにほかならない。その意味で、都市民ほど伝統的な身体に刻まれてきた生活技術を消失させてしまっていると言える。伝統的身体文化の喪失である。

文 献

- 1) 中尾佐助 (1966) 栽培植物と農耕の起源。岩波新書。
- 2) 中尾佐助 (1972) 料理の起源。日本放送出版協会。
- 3) 佐川哲也・大澤清二 (1991) タイ国ウボン県における子どもの伝統遊びの消失とスポーツの普及。体育学研究 36: 209-218。
- 4) 渡部忠世 (1970) タイにおける「モチ稲栽培圏」の成立。季刊人類学 1(2): 31-54。

SUMMARY

The purpose of this study is to investigate the urban-rural differences of food preparation clothing and shelter in northeastern Thailand, as it is effected by four factors. The four factors were divided into stage 1) procuring raw material (planting), 2) the primary manufacturing (spinning and weaving, polishing and sawing a log into timbers or boards), 3) the secondary manufacturing (sewing, cooking and building) and 4) consuming (wearing, repairing and washing clothes, eating, dwelling and repairing houses).

In regard to clothing, Lao people in both the cities and the villages possess only the fourth stage

or wearing, because of losing the first stage (planting), the second stage (spinning and weaving) and the third stage (sewing). In regard to sticky rice, people in villages have had many kinds of skills in all four stages of keeping the traditional habit of eating sticky rice. People living in cities have abandoned skills at the first stage (planting) and the second stage (polishing) with a decreased rate of eating sticky rice. People in cities have lost a lot of building skills due to the move from pile dwelling. However, people in villages have pile dwelling building skills because they continue to live in pile dwellings as of today.